アマチュアオーケストラ

新交響楽団 第125回演奏会

指揮■原田幸一郎　独奏■毛利伯郎

ベートーヴェン■交響曲第8番ヘ長調
ドヴォルザーク■チェロ協奏曲ロ短調
R.シュトラウス■交響詩「死と変容」

1989.10.22(日)2:00p.m.

新宿文化センター

アマチュアオーケストラ
新交響楽団第125回演奏会

ベートーヴェン：交響曲第８番ヘ長調

Ludwig van Beethoven：8. Sinfonie F-Dur

Ⅰ：Allegro vivace e con brio
Ⅱ：Allegretto scherzando
Ⅲ：Tempo di Menuetto
Ⅳ：Allegro vivace

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲ロ短調

Antonin Dvořák：Konzert für Violoncello h-moll

Ⅰ：Allegro
Ⅱ：Adagio ma non troppo
Ⅲ：Finale, Allegro moderato

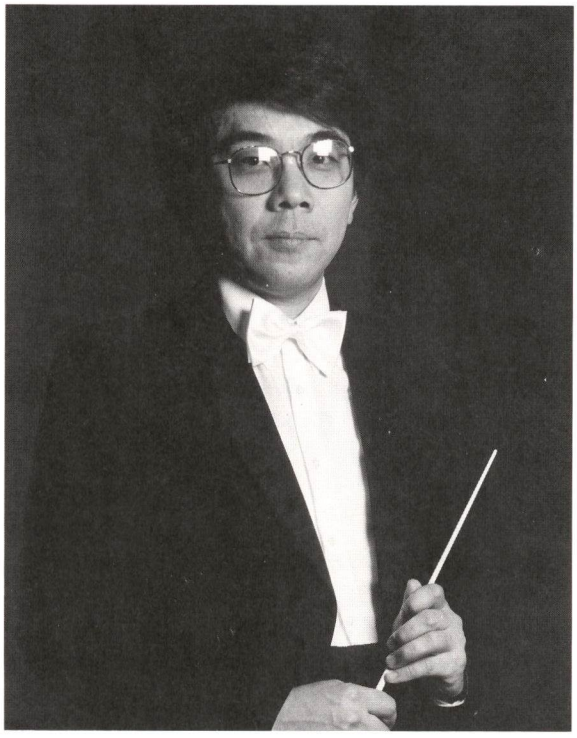
―― 休　憩 ――

リヒャルト・シュトラウス：交響詩「死と変容」

Richard Strauss：Tod und Verklärung

1989年10月22日（日）２：00 p.m.
新宿文化センター
主催：新交響楽団

原田　幸一郎 ――指揮者プロフィール



1945年生まれ。桐朋学園とジュリアード音楽院で齋藤秀雄、秋山和慶、ドロシー・ディレイ、イヴァン・ガラミアン氏らにヴァイオリンと室内楽および指揮法を学ぶ。

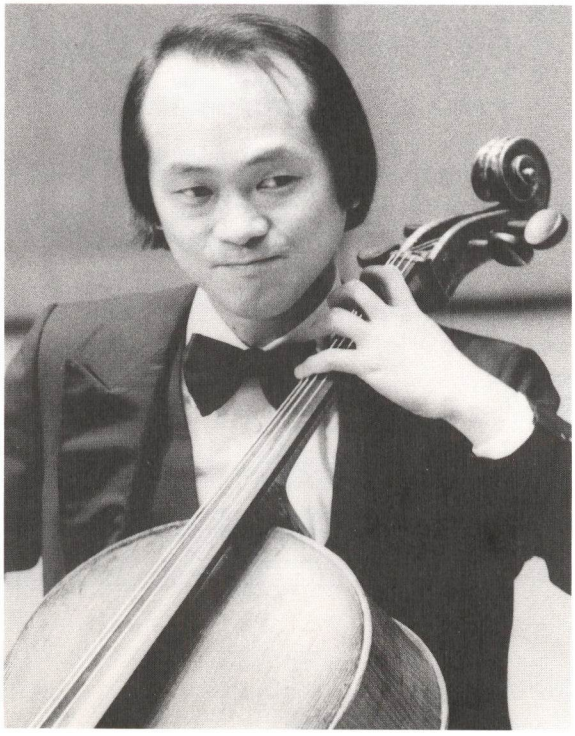
69年から12年間、東京クヮルテットの第1ヴァイオリンを務め、世界の桧舞台で常に高い評価を受けてきた。81年に東京クヮルテットを離れ、クリーヴランド音楽院のヴァイオリン科主任教授とイェール大学、アスペン音楽祭でも教鞭をとりつつ、室内楽奏者として、ニューヨークのリンカーン・センターやワシントンDC等のコンサートで広く活躍。

83年から日本に居を移し、ソリストおよび室内楽奏者として内外で活躍。さらに86年には数住岸子と"NADA"（ナーダ）室内楽シリーズをスタート、従来にない高度なアンサンブルを誇っている。

88年4月、九州交響楽団の〈モーツァルト定期〉で指揮デビューを飾り、翌月の新日本フィル〈ハイドン定期〉の東京デビューも好評を博した。さらに桐朋学園のオーケストラをたびたび指揮するほか、今年も〈ハイドン定期〉への再登場、〈倉敷音楽祭祝祭合奏団〉等を指揮。

現在、桐朋学園、東京芸術大学で教鞭をとる。国際的に高く評価されている名手で、日本の音楽界、特に室内楽の分野での今後の貢献に大きな期待が寄せられている。

毛利　伯郎 ――独奏者プロフィール



静岡県生まれ。10歳よりチェロを始める。父君は医師で、群馬交響楽団の創立時のチェロ奏者。桐朋学園、ジュリアード音楽院で青木十良、ハービー・シャピロ両氏に師事。ジュリアード・オーケストラ公演ではソリストとして参加し、多くの1等賞を得る。

1977年チリで行われた国際チェロコンクールで最高位を受賞。ワシントンDC、ケネディ・センターのシアター・チェンバー・プレイヤーズのメンバーを数シーズンにわたって務め、ゲスト・アーティストとして欧米各地で多くのシリーズに出演した。共演したアーティストはユーディ・メニューイン、林昭亮（リン・チョーリャン）、リン・ハレル、ウィリアム・ベネット、ゲーリー・カー、キャサリン・バトル、エマニュエル・アックス、キース・ジャレット、トビー・ホフマン他多数。

1985年帰国。読売日本交響楽団ソロ・チェリストに就任、現在に至る。同時に東京チェンバー・ソロイスツのメンバーとして原田幸一郎、数住岸子、川崎雅夫、岩崎洸等と共演する。1986年より東京ヤエス・メッグホールにて「八重洲室内楽シリーズ」を2カ月ごとに開催。日本では異例なこの試みは高く評価されている。また、シークリフ・チェンバー・メンバーズ、カンティレーナ・チェンバー・プレイヤーズのメンバーでもある。

ベト８雑記帳

by 指揮台の下のヴァイオリン弾き

知っていて損のない豆知識

1．緩徐楽章がないため、９曲の交響曲のうち演奏時間は最も短かい（約26分、次は１番28分、５番「運命」29分等々）。

2．第７交響曲と同時期に作曲され（1812年）、同時に初演された（1814年）。７番の方がはるかに評判がよかったが、ベートーヴェンは「８番の方がずっとよく書けているのに」と不満を述べたという。

3．第２楽章にしばしば現れる、木管とホルンの16分音譜のスタッカートは当時発明されたメトロノームがチクタクと時を刻む音を表わしている。メトロノームの発明者メルツェルとベートーヴェンは親友であり、あるパーティーの席上ベートーヴェンはメトロノームとメルツェル両方をもじった、“チクタクチクタク…親愛なるメルツェル君、ごきげんよう”というカノンを即興で作曲、後日第８交響曲の２楽章としてそのまま使ってしまった。

4．９曲の交響曲のうち、古典的なメヌエットの楽章があるのはこの８番のみであり（第３楽章）、他ではスケルツォ楽章となっている（第１番３楽章はメヌエットとなっているが、実質的にはスケルツォ）。

楽章毎の聴き所と演奏者の泣き所

第１楽章：

譜例①に示されている様に、冒頭４小節は全楽器のユニゾンですが、より正確には第１小節＋２拍分はヴァイオリンのみが活発なメロディーをかなで、次の拍から“全員集合”という形。演奏会冒頭でもあり、テンポも速いので、“潑剌として一糸乱れず”の演奏はなかなか難しいのです。おまけに本日の指揮者原田先生はこの楽章を“３つ振り（１小節を４分音符毎に３拍に分けて振る）”ではなく“１つ振り”で指揮される予定。３つ振りに較べ音楽の流れはずっとスムーズになる訳ですが、オケに課せられるアンサンブルへの責任は格段に重くなります。新響がいかに対応するか、御注目（耳？）下さい。

余談になりますが、今は亡きカラヤンとベルリンフィルが20数年前来日してこのベト８を演奏した時、カラヤンが指揮台に飛び乗るやいなや棒を振り下したので、楽器を構えきれなかった団員が相当いて、この

譜例①



譜例②



譜例③



冒頭４小節はドタバタバタという結果になりました。５小節目からすかさず立ち直ったのはさすがでしたが。

この第１楽章、弦楽器奏者は相当の腕力を要求されます。*f*、*ff* そして *fff* さえの16分音符のキザミが随所にあるからです。最後は、冒頭１小節＋１拍のメロディーが *p* で奏されて終りますが、某古参団員によれば「最初のメロディーは“あゝ、楽しいなー！”という語呂合せで元気よく、最後のメロディーは“あゝ、くたびれた！”という気持でそっと弾くとこの楽章の感じがよく表現できる」とのことです。

第２楽章：

前述の如く、木管とホルンのメトロノームの様に正確な *pp* のスタッカート・リズムにのって、ヴァイオリンと低弦が“輝く光が踊っているような” *pp* の対話を始めます（というのが理想です）（**譜例②**）。現実は、しかし厳しい。管にしても弦にしてもイキイキと弾こうとすれば音が大きくなる、*pp* と思えば縮こまってしまって、音はかすれ、リズムは乱れ、音程はぶら下り…。今回、特に管楽器のメンバーはこのキザミを原田先生に徹底的にしごかれました。「弦の連中はざまあみろと思っている」とか「演奏会後原田先生が無事に帰れるか危い」等々物騒なウワサは紳士淑女の集団、新響にはありえないことですが…。

第３楽章：

のびのびとした田園的な気分に満ちたメヌエット。トリオでの、２本のホルンとクラリネットの楽しげなやりとりは聴きものです。このスター達を裏で支えるのがチェロ。難しい *p* の３連音符を延々と弾き続ける必死の形相を注視するのも一興かも。

第４楽章：

譜例③の如く、ヴァイオリンの６つのキザミで小節後半からスタート。このキザミはこの楽章を支配し続けます。しかし、速度記号にも御注目下さい。𝅗𝅥＝84（60秒間に84小節弾く）ということは、１小節にかけられる時間は0.71秒、このキザミ１個はわずか0.06秒、もしくは１秒間に17個キザミを弾く速さという計算になります。世界で最も速く弾ける人でも１秒間に16個といわれているのですから、これはかの Tokyo Quartet をもってしても無理です、ホント。

ちなみに、この楽章は502小節あり、ベートーベンが指示した速度で演奏すれば６分弱（𝄐が３回あるので＋α）で終る計算ですが、どのレコードでも７～８分要していることから考えてみても、彼の指示がいかに速すぎるか御理解いただけるでしょう。

という訳で、本日の演奏は指示よりもやや遅いテンポで、それでも間に合わない時はキザミの数を少々間引く、キチンと弾いている振りをする等々、創意工夫し、演技力を駆使して、ベートーベンの音楽に精神的に奉仕することになるでしょう。

（コンサートマスター　都河　和彦）

ドヴォルザーク　チェロ協奏曲

新響と「ドボコン」と

「あなたの知っているチェロ協奏曲は？」と聞かれて、まず最初にドヴォルザークの名前を挙げない人はいないであろう。それほど有名で、もう何度も聞き慣れたはずのこの名曲を、今新響が取り上げて演奏する意味は一体どこにあるのだろうか。

プロ、アマを問わず、長く演奏を続けているオーケストラでは、いわゆる「名曲」の類は大抵演奏ずみで、中には何度となく演奏される曲も珍らしくない。この「ドボコン」もそういう曲の部類に入るはずなのだが、新響の30年の歴史をふり返ってみてもなぜかこの曲については演奏した記録が残っていない。「ドボコン」に限らず、新響ではコンチェルトそのものが演奏される機会が少ないのも事実である。これは、新響が定期演奏会でコンチェルトを演奏するのは、我々が演奏したい曲、ソリスト、指揮者がうまくマッチした時に初めて実現されるからである。このことは、今回の「ドボコン」が取り上げるべくして取り上げられた曲であることを物語っている。有名なチェロ奏者が来日するたびに伴奏しなければならないプロのオーケストラとは本質的に異っているわけである。

さて、今回のソリスト毛利先生の艶やかな音色と「うた」、指揮者原田先生のリードと演奏者としての感性……新響が初めて「ドボコン」を取り上げるに至った経緯を充分納得して頂けると思う。

望郷のコンチェルト

ドヴォルザークがニューヨークのサーバー女史のたっての要望で、はるばる大平洋を渡ってニューヨークのナショナル音楽院の初代院長に就任したのは1892年の秋のことである。ジェット機で大西洋をひとっとびとは言いがたい時代のことであったから、ボヘミアの作曲家ドヴォルザークにとって、当時新世界と呼ばれていたアメリカに渡るのは、いささかの勇気が必要であったことだろう。

それから２年半のアメリカ滞在中は、ドヴォルザークの生涯で最も忙しく、また充実した時期となった。このチェロ協奏曲ロ短調は、交響曲第９番「新世界より」や弦楽四重奏「アメリカ」等の傑作とともに、この時期の代表的な作品に数えられている。

アメリカでのドヴォルザークは不思議な体験をする。異郷の地であるはずのアメリカで耳にした黒人霊歌や、アメリカインディアンの歌に郷里ボヘミアの香りを感じるのである。

理由は明らかだった。ドヴォルザークがアメリカで聞いた音楽には、ボヘミアの民謡に似たところがあった。ド、レ、ミ、ソ、ラ、ドの五音音階、独特のシンコペーション……遠い世界から彼は故郷ボヘミアを思い懐かしむのであった。

アメリカに渡ってから一年半後の1894年３月、彼の父親が亡くなった。しかし彼はその死を見取ることができなかった。また、ちょうどその頃、彼は相次いで親しい友人を亡くしている。一人はチャイコフスキー、もう一人は名指揮者のハンス・フォン・ビューローである。ドヴォルザークの研究家ショウレックによると、彼がこの頃ボヘミアの友人に出した手紙には、どれも堪え難い望郷の念を訴えていたという。

1894年の夏、彼は夏休みを故郷で過ごすため、早々と大西洋を渡っている。故郷の友人達に迎えられ、彼はようやく自分を取り戻すことができたのである。

故郷ボヘミアの夏を満喫したドヴォルザークは再びアメリカへ旅立ち、同年11月より再びナショナル音楽院の公務についた。再び始まった激務の間に作曲されたのがこのチェロ協奏曲である。この頃になると彼の望郷の想いはますます募り、それが作品にも顕著に現われている。

第１楽章　アレグロ
第２楽章　アダージョ・マ・ノン・トロッポ
第３楽章　フィナーレ　アレグロ・モデラート

ブラームスはちょうどこの曲の８年前に有名な「ヴァイオリンとチェロのための協奏曲」を作曲しているが、この曲を聴いて「このようなチェロ協奏曲が書けることに、私はどうして気がつかなかったのだろう。もし気がついていたら、私自身がとうに書いていただろう」と称賛したと言われている。　（Vc. 加納　隆）

R. シュトラウス　交響詩「死と変容」――シュトラウスとホルン

この曲は、1989年、R. シュトラウス25歳の時の作品で、1890年６月21日に彼自身の手で初演されました。題名から受けるような重さ・暗さはあまり無く、彼らしい明快な手法でまとめられています。

曲は、４つの部分から構成されており、最初に「死」に関する様々な要素が描き出され、その後、変容（浄化）へと移り、穏やかに全曲を終わります。

とまあ、曲目解説はひとまず終わらせていただきまして、以降は、R. シュトラウスとホルンの関係について触れてみたいと思います。

R. シュトラウスは、ホルンを最もホルンらしくうまく用いている作曲家といえます。「彼の初期の作品は、どんなに難しいパッセージでも、そこにかならずホルンらしさというものが生きているのである。しかも、他の楽器とはっきり区別して、ホルンの基本的な響きや技術的特性を充分考慮して書かれている。事実『ティル』の主題のホルン・ソロは、倍音列に対する彼の直感的な理解と、ホルンに対する広い知識によって作られた見事な模範であり、まさにホルン・ソロの極致といえよう。彼のホルンの書き方はすべて低音域に開離、高音域に密集させるという、倍音列の基本的概念を常に固守している。」* つまり、現代の様に全ての半音が出せるようになる前の、ナチュラル・ホルン的な使い方をしているのです。

しかし、その反面、演奏が非常に難しいという問題も出てくる訳でして、「今世紀の初めホルン奏者たちは、シュトラウスのホルンの書き方が、全く楽器に対する無法な侮辱だと非難した。しかし今では彼のようなホルンの書き方が、いくつかの晩年の作品を除いては、最も慣用的な手法の一つとして認められている。」* というように、当時のホルン奏者たちにとって、かなり難物であった様子がうかがえます。どうしてこの様な難しいパートを書くようになったかといいますと、やはり、父親のフランツ・シュトラウスが、当時ヨーロッパで最も偉大なホルン奏者であった事が一番の原因のようです。どれだけうまい奏者だったかといいますと、「フランツが演奏を始めると、いつもは争ってばかりのワーグナーも指揮の手を止め、他のメンバーもつい聞き惚れて自分の演奏を忘れた。」☆ という伝説があるくらいで、「当時まだ論議のかまびすしかったワーグナーの作品をこの世の響きとする上で不可欠の名手であり、ことに楽劇で要求される大音量と優美で魂のこもったトリスタン的半音階の上下動の繊細さは、以降、ブレイン親子が現れるまでの40年以上もの間誰も越えられなかった。」☆ とまでいわれる程のスーパー・プレイヤーだったのです。そのおかげで、R. シュトラウスが「ホルンという楽器に対して、単なる統計学的な知識以上の感情を持てた。」* のです。

という訳で、我々ホルン奏者にとって、やりがいのある曲をこんなにたくさん残してくれてありがたいものの、フランツのような名手を対象として書かれている箇所は七転八倒している訳でして、まあ…その…、いい作曲家ですね…。　（Hr. 佐伯　幸良）

* G. Schuller：Horn Technique より

☆ Kurt Janetzky：Franz Strauss' "Les Adieux"–Vorrede より

世界のアマチュア・オーケストラ事情

中村孝志さんは証券会社に勤務。転勤による２年間の英国生活を終えて今年帰国、夫婦ともども新響に復帰した。インタビュアーは音楽評論家で「アマチュア・オーケストラ入門(音楽之友社)」の著者である近藤滋郎さん。

――ロンドンにいらしたのはいつの頃のことですか。

中村孝志(以下Ｔ)：僕が赴任したのは1986年の12月で、家族は２カ月ほど後に行きました。帰ってきたのが今年の２月ですから、ちょうど２年いたことになります。

――ロンドン市内にお住いだったのですか。

Ｔ：いいえ、ロンドンの南、車で40～50分ほどのクロイドン市のそばのパーリーという町に住んでいました。電車ですと30分足らずでロンドンに出られます。ゴルフ場に囲まれたとても良い場所でした。

中村昌子(以下Ｍ)：日本の感覚で言うと八王子くらいの感じかな。

――オーケストラはどうやって捜したのですか。

Ｔ：地域のことに関する資料は何でも図書館に揃っているからそこで調べなさいと教えてくれた人がいたんです。それには、どのオーケストラが、どこで、何曜日に練習していて、連絡先はどこ、といったことが全部書いてありました。

クロイドンでは２つのオーケストラが活動していました。一つは二管から三管で60人ほどのものと、もう一つは普段は弦楽合奏団として練習していて、演奏会の時だけ管楽器のトラを音楽大学から呼んできてシンフォニーなどをやるという、日本では見かけないものでした。ただロンドンの中心部には、大編成のアマチュア・オーケストラもあったようです。

Ｍ：そういう大きなオーケストラはセミ・プロ的な感じで、音大を出た若い人が多くいるという話です。

――それでクロイドンのオーケストラに入ったのですね。

Ｍ：いいえ、オーケストラではなくてわたしはその弦楽合奏団に入ったんです。メンバーは20～30人ほどで、昔楽器を教えていたという人から初心者に毛が生えたような人までが一緒になってやっていました。日本といちばん違うのは老人が多いことで、若い人と一緒に楽しんでいるのが印象的でした。これはどこのオーケストラでも同じだそうです。

この弦楽合奏団は市のアダルト・スクールの一環としてやっているんです。ですから団員が直接指揮者に礼をするというのではなくて、アダルト・スクールに受講料を納めてスクールが礼金などの活動費を出すんです。公立のカルチャー・センターみたいなものですね。練習は小学校を使って毎週、平日の夜３時間ほど、音楽シーズンに合わせて９月から６月頃までだけ活動して夏の間は



完全に休みです。演奏会は定期が年に２度、土日にやったから数としては４回、そのほかにチャリティー・コンサートが２、３回ありました。

――どんな曲を演ったのですか。

Ｍ：ドヴォルザークのチェロ協奏曲や第７交響曲、シベリウス第２交響曲…。でも練習のときは弦楽器だけですから、新響の弦練(弦楽器パートだけの練習)だけをやっている感じで…。それが演奏会前のゲネプロになると音大からトラが来てはじめて管弦楽になるんです（笑)。

――指揮者はどういう人でしたか。

Ｍ：音楽大学の先生ということでしたが、日本でいう、いわゆるプロの指揮者ではなかったみたいです。

――弦楽合奏団ではトランペットは入れないですね。

Ｔ：ええ。僕も入れてもらおうとしたのですが管楽器はダメということで入れてもらえなかった。

ロンドンではブラス・バンドがいちばん盛んで、これはほとんどの町ごとでやっていたみたいでコンクールも盛んに行なわれていました。それと古楽器のアンサンブルもたくさんあって、僕はそこでツィンク(中世・ルネッサンス期の木管リップ・リード楽器)を吹いていました。

――オーケストラができないウサ晴らし？

Ｔ：そうでもないですが（笑)。ただ面白かったのは、演奏するだけでなくて当時の衣装を着てダンスの伴奏なんかもするんです。踊りと音楽が密接につながっているのを実感しましたね。

Ｍ：むこうの人は仮装パーティーが好きですね。子供の誕生祝のパーティーでも仮装して来い、とか。

――合奏団の演奏レヴェルはどうでしたか。

Ｍ：本番はトラが入ってかなりまとまりますけれども、普段のレヴェルはけっして高くは無いです。ですから音楽的な満足感はそれほど大きくなかったけれど、地域の人たちとの付き合いができればと思ってましたからその面で面白かったです。練習の合い間には必ずティータイムがあって、そのときにいろいろな話ができましたから。

Ｔ：新響のようなアマチュア・オーケストラは向こうには無いようですね。

――どうも有難うございました。



越

MITSUKOSHI
日本橋 〒103-01 東京都中央区日本橋室町1-4-1
TEL/03-241-3311(大代表) ●月曜定休

情報は友だち

RICOH

わたしはやさしい。
わたしは高性能。
そのうえ4倍。



誰にでもやさしく撮れるオートフォーカスカメラMIRAIは、35-135㎜の高性能4倍パワーズーム内蔵カメラ。ワイドな画面をもつ広角35㎜から迫力あるアップが撮れる望遠135㎜まで画面サイズは自由自在。また、専用のテレコンバーター(別売)をつければ、なんと200㎜というスーパー望遠に。写真が大きく楽しめるMIRAI。高級一眼レフのクオリティを、コンパクトカメラの手軽さで実現した、まったく新しいカメラです。



●35-135ミリ、望遠比4倍に迫る高性能パワーズーム内蔵 ●AF補助光を内蔵したひとクラス上のTTLオートフォーカス ●秒2コマのオートワインダー ●撮影意図とシチュエーションに応じて自由にシフトできるプログラムAE ●撮影前に露出の適・不適を知らせるストロボ調光システム ●ディテールに迫れる、マクロ機能つき ●テレコンバーターをつければ、200㎜の本格望遠に

高倍率・高性能コンパクトAF一眼〈ミライ〉

MIRAI

●メーカー希望小売価格 MIRAI本体……73,000円(税別)
●メーカー希望小売価格 MIRAI Date本体…77,500円(税別)

リコーMIRAIカタログ請求は 〒104東京都中央区銀座6-14-6(リコー三愛ビル) 株式会社リコー 光学事業部 TEL.03(543)4191までご請求ください。

まもってほしいのは、ハートです。



音楽には著作権があります。人で言うなら、それはハートです。作詩家や作曲家が、夢と感動を美しい〈かたち〉にした音楽——
それを健やかに育てるために、JASRACは音楽のハートを大切に、その確かな鼓動を見守りつづけています。

JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　石本 美由起
〒105東京都港区西新橋1-7-13 ☎(03)502-6551

(おかげさまで、半世紀)
50th ANNIVERSARY
JASRAC 1989